
能力名は T.N.K.

ひょうきん者によろしく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

能力名は T・N・K・

【Zコード】

N7727X

【作者名】

ひょうきん者によるじく

【あらすじ】

これは、21世紀に超能力が普及しているつていう設定のお話……なんてあってもイマどき見向きもしないかもネ。さて、紹介続けるから帰らないでね……能力が未発現な田中は、その上、人格的な問題で周囲から浮いてしまっていた高校生男子、見兼ねた教師の言葉に愕然として、自分自身をよく見て、なおしてこいつとする。

とにかく、

読み

わかる！

ば

え？ 超能力モノの主人公って、大概がクールでキザで、性格も普通だろつて？

そんなことない、そんなことない。

さて、この小説には、そんな能力アリなの？ 審査員呼んじやうよ

? な能力が

登場しちゃうけれども、怒らずに、保温設定の給水機並みの目でご覧ください。

そして、ようやく、主人公に、超能力者予備群としての兆しが見えたようです。

No.1：プロローグ、まあ、中心人物の紹介（たぶん）（前書き）

はじめに。

僕の小説（未満もとい妄想）は「なんでこんな主人公はいないんだろう」が出発点です。

とりあえず、

読めば　わかる！

No.1：プロローグ、まあ、中心人物の紹介（たぶん）

21世紀日本には、あるものが、一般的に普及していた。

「提出物、出してねえ！」

机についた少年の隣りを誰かが通り過ぎていった。いや、何か黒い影が、一瞬みえた。

ほら、エレベーターの扉が開いた一瞬に、あるいは、ふと部屋の隅に一瞬見えて、気のせいで済ませる、アレ。

あ、わかんない人はスルーしていいよ。

ボ。

前方に炎があがつた。

「こら、教室は火気厳禁。」

すかさず、教員が注意をする。

「すんません。……俺は、こいつのが伸びてきたからイギリス式のバーバーをしてやろうとしただけなのに。」

彼の指先で炎が揺れていた。

「絶対、根に持つてるだろ。」

された側はそもそも思わないらしい。

事実、耳の産毛どころか、首から上が焼き鳥になつてただろう。さて、ここでの話の中心人物はといつと。

……少し巻き戻してみよう。 じいいいいいいいい……。

「絶対……」 もつと前。

びゅううう。

「……からイギリス式のバー・バーを……」 もおちよい。
机についた少年の隣りを誰かが通り過ぎていった。

ストップ。 ロロ、 ロロ。

いや、速い彼のほうじゃないよ。

誰つて。

そこに座ってるヤツ。

通称 田中。

成績中くらい。

……に、しがみついてるカンジ。

体力平均。

……下。

彼のクラスには

電気出したり、発火しちゃったり、メチャクチャ速い、タリラリラ

ーなパパの後輩の息子さんみたいなのもいる。

何つて、いわゆる、超能力。

それは一般的なものであって、ほかにもいるよ。
さて、先ほどの彼はというと。

通称 田中。
能力 未発現。

あ、つまり、ない、てことなんだよね。

……。

それだけならいいけど、彼は精神的なところが、幼稚なんだよね。
劣等感持っちゃってさ、色々なものを捻じ曲げて解釈してしまつようになつたんだよね。

目の前の微笑みを嘲笑ととらえたり。

目を見てわかる人つて、すごいことなのに、半人前でそれをして、何も見えないのに、「こいつは裏で何考えてんだ」と、疑つたり。

イタイひと。近寄りがたい変人。そうなつちゃつたんだね。
それを見かねた去年の担任の先生は、彼に教えた。

木を見ずに、森を見る。

お前は優しい、けど思いやりが足りない。

自分を見つめる、そして自分で考えて、自分を創つていけ。

彼は衝撃を受けた。

その日から、彼の雰囲気に刺々しさが少しだけなくなつた。

・・・

今日は俺の誕生日だ。

俺は昨日のテレビの内容を思い出した。

それは、真面目なバスの運転手のおっちゃんが、いきなり演奏したサックス奏者の客や道を塞ぐデモ行進にハラハラするが、乗客の一人が自分の誕生日の歌を歌い出したところでサプライズだとわかり、笑顔をみせるというものだった。

「悪くないね。」

ハハハハ……。つい思い出すと笑いを漏らさずにはいられない。

見てるこちらも幸せになつたのを覚えている。
……さて、帰るとするか。

ポン。

!

ハッピーバースデー　トゥーユー。　ハッピーバースデー　トゥーユー。

ん？　なんだなんだ。

どこのやつか知らんが俺までウキウキするな。

「ト。

目の前に掌サイズのシナモン香る、ケーキがおかれた。

ハッピーバースデー、ディア　優真。　ハッピーバースデー　トゥーユー。

拍手されている。名前を呼ばれるなんて久々だ。

あんたら見ない顔だね？
どうして俺の名前を？

そこは突っ込むべきところのかもしねない。しかし、実際に起
きればそんなことは気にならず、

ただ、ただ、嬉しい。

俺は、口の端が、若干持ち上がっているのを感じた。
目を細めていた。

目の前に、四人、誰かが立っていた。

すぐ目の前には、白いワイシャツにありふれたグレーのネクタイ、同じく落ち着いたグレーのスーツを着た人がいた。髪は、誰にも反感を買うことがなさそうなほどに短すぎも長すぎもない平均的な長さであった。唯一、その髪の色がグレーであることが、外見における個性といえた。いわば落ち着いた、特徴は「フツー」の一言で片付く営業部の社員みたいな外見。

その左隣に高い帽子がトレードマークのコックを。こちらは背が高く、肌は褐色で体が丈夫そうだ。

反対にはウエイトレス。

もう一人はサンバイザーを付けて、カメラを回していた。

グレーのスーツの人は、俺と年はそう離れてなさそうだった。他は年齢的にバラつきがあった。

そして、全員何故か女性だった。

彼女らを惚けて見回していると。

「ほら、何ぼうつとしてるの、火、火！」

目の前にいたグレーな人に急かされて、ふつひひひひひひひひ、
と吹いた。

拍手がまた響く。

悪くないなあ。

一言、言つた方がいいかな。

「いやああ、本当にありがとう。まさか誰かに祝つてもらえるとは、少なくとも学校では思わなかつたなあ。
こりやあ、次はあるかわからないから、忘れることはないねえ。」

「ほら、ケーキ食べたら。」

またまたグレーな人に急かされるようにして、一人前のケーキを平

らげた。

その後、年が少し上なコックさんに感謝すると、がはは、とオヤジ臭く笑つた。

N o . i : プロローグ、まあ、中心人物の紹介（たぶん）（後書き）

まだ主人公（としては人並み未満な田中）について続きます。
一話目もよろしくお願いします。
もう一度言います、

読めば　　わかる！

N O . 2 : 設定紹介ではないけれど、まだまだ中心人物について（次からやるよ）

まだまだ中心人物について続くから、今日は一本立て（一本投稿）！
次からやります。マジです。

N.O.・2・設定紹介ではないけれど、まだまだ中心人物について（次からやる）

誕生日の日は、悪くなかった。

今日は若干、気分がましだ。

「 よう、田中。」

こいつは、船山、自称親友だったやつ。
最初つからその気がないのはよくわかる。ぱしりを断つた後日にだ
つたからよくわかる。

「お前、なんか昨日あつたそうだな。」

「え、あんた、もしかして俺の誕生日知ってる？」

「え、田中、お前誕生日だつたの？ おめでとう。」

こういうヤツはほとぼりが冷めたら（そう本人が思っている）特に
なんてことはなかつたりする。

じゃあ、と教室前でわかれだ。

・・・

その日の昼休みだった。

「ねえ、田中、どうして田中つてうまれてきたの？」

一枚瞬が、大きな眩きをなげた。

トイレでの出来事だつた。

前の俺だったら、無意味な反撃をして、つまらないけどキツイ攻撃
を精神的にも受けたかもしない。

俺はそのまま立ち去つとした。

ガシ。

「おこ、無視すんなつて。」

引き戻された。

向こうが殴る姿勢をとったため防げりとする。
すると、やうはせずに、向こうはいかの反応をみて、ビビリて
ビビリてると、挑発していく。

そしてまた、向こうが拳を引いたので再度防げりとするが。
それはフロイントであって、足を持ち上げるより、口ウキはなつ
てきた。

すぐに、膝を上がり、ふくらはぎと腿で受けるが、痺れる。
バス、とワイヤーシャツの擦れる音がした。
気づくと、ヤツの拳が、こちらの腹にめり込んでいた。

思わず、ひとなる。

膝を一二度いれると、ヤツは、舌打ちをした。

田中よわ、死ね！

と、ただ一言、それだけ言つて去つていった。

……。

ああ、氣分が悪い。

ああ、つまらない。

やはり向うなるのか。

俺は向こう常に誰かの氣まぐれに振り回されていかなきやならな
いのか。

俺も悪い、あの教師だって言つていた、オレでも虚めたくない。
それに、一枚は、まともなヤツには軽い程度のちょっかいしか出さ
ない。

これからは俺も自分のことをしっかりわかつて、変えなくてはいけ

ない。

そう思いつつ、俺は教室へ向かった。

No.2：設定紹介ではないけれど、まだまだ中心人物について（次からやるよ）

田中についておわかりいただけましたか。
次回もよろしくお願いします。

では、また来週。

Ｚｏ・＼…・せ・じ・せ・れ・わ・べ、 中途半端だと思ひのや進める。 (記者)(

自分でもアレは、 もやる世代の路上紙面にいつも切つが悪いと想つ
たので、
次いきます。

Ｚｏ・Ｚ・Ｚ・Ｚ待てねえ、中途半端だと懶けのや進めるよー。

それは帰りのことだった。

歩いていると向こうに男子バレエ部員らしき後輩たちの集団が歩いていた。

目が合うと、なかでも最も長身で茶髪（生まれつきだとあもつ、たぶん）なやつが、にたりとした笑みで

周りに何やら話しかける。

たまに話していたサブカルな知り合いの話に一枚、他数名が後輩に

俺の話をしていたから注意しき

といつのがあった気がした。

俺は普通に通り過ぎようと思つた。

遠くから見ても一枚目で、女子とも仲がいいらしい（登校口前で見かけた）。近くに来ると170は、あった。

身長は仕方ない。俺は163だ。

俺はクールな主人公みたいなやつではなく。

世界を救う英雄、国を統治する優秀な為政者、永く語り継がれる伝説に。

……なりたいけど、実際は婦人の尻を蹴飛ばしたり、子供からアメ玉をちよろまかすことが精一杯な、喜劇王を目指したい。

わかるひと、いたら嬉しいよ。

擦れ違う時だった。

ガ。

足を引っ掛けできやがった。

振り返ると彼らは、こちらを向いて嘲笑していた。

俺はそのまま立ち去りうとした。

……が、あることを思い出した。

これはもともとの内容は忘れたが、情報に関する本に……。

相手と会話するうえで重要なのは、知識も能力もそうだが、それ以前にもつていなければならぬのは、

自分の尊厳を傷つけられたときに、怒れる」とある
……と書いてあつた。

相手である、長身茶髪のやつは目の前にいた。俺は、怯えを隠して、尻に蹴りを入れた。

小物収納一ぱ一ぱ

ああ、情けねえ。

振り向く、ひりこぼりに迷ひ

蒼い。

そこには白い道着の格闘家も真っ青な、わけのわからないものが、道の両脇を粉碎しながらこちらに迫っていた。超能力社会に生きるってこういうことか。

俺も超能力を使つた争いの見物はしたことが何度かあつた。野球に興味がない人と一緒で、何がどうとかは、さっぱりだ。

でもこのとき俺は思い出した。

炎操作能力者に対して、物理的念動力者が張ったシールドを。

俺はできないとわかつていた。

でも気が付くと右手を前に出していた。

やりたかったな、超能力。

Ｚ・・・…せひ待てね、中途半端だと思ひのやうなモノ。」（後書き）

何とか漫画雑誌並みの区切りができるましたか。
次回お楽しみに。

20・4・転（前書き）

更新日は、日曜と木曜に変更。
さて、やっと話が始まつてきました。

目の前に蒼い、エネルギー球みたいなやつが迫ってきていた時だった。

俺は目を瞑つた。

笑うことも忘れない。

俺が好きなフレーズにあつた。

その男の死に顔は、まるで微笑んでいるようだつた。

……せめて自分が好むように死にたい。

やりたかつたな、
超能力。

You Loose!

1

格ゲーでお馴染みのあのロゴまで見えた。

..... ﻪـ ﻰـ ﻲـ ﻮـ ﻰـ ﻢـ ﻰـ ﻦـ ﻰـ ﻪـ ﻰـ ﻲـ ﻮـ ﻰـ ﻢـ ﻰـ ﻦـ ﻰـ ﻪـ ﻰـ ﻲـ ﻮـ ﻰـ ﻢـ ﻰـ ﻦـ

蒸氣があがる音が聞こえる。

目を開けた。

「病院の布団はこんなに硬いものなのか。」

見えたのはどこまでも茜色な天井だった。
立ち上がると、そこはアスファルトの上だった。

……天変地異が起きたらしい。
俺は立ち上がることができた。
歩くこともできそうだ。

生きているつて、スバラシイ（ 、 、 ）

そして、そんなことよりも奇天烈な光景が目の前にあった。
そこには……。

黒い集団がいた。

……ほら、アレ。

ドラマで自己主張に目覚めて立て籠もったおつちやんを包囲している大勢。

いわゆる特殊部隊つてやつ。

お馴染みの、ジャケットにプロテクター、合成樹脂でガードされたヘルメットでかためていた。

約5人くらいでこれまたお馴染みな盾を構えて、こちらに背を向けて踏ん張っていた。

辺りを見回した。

誰か状況教えてもらえないかな。いないのか。

「只今、能力者の襲撃に対応していたところです。」

ハスキーな女性の声に振り向くと、前で構えて背を向けている彼らと同じ装備の女性隊員が、ヘルメットの開口部を開けて、直立不動で立っていた。

金髪が見えた。瞳は蒼い。西洋の人か。
背は180ありそ。あの長身茶髪より高えもん。

それにしても落ち着いた日本語だな。

あ、それよりも。

「あの、僕はどうしたらいいでしょうか。」

他所行きの口調で訪ねた。

しかし、かえってきたのは意外の一言だった。

「やのよつな」とを言われては「ちぢらが困ります。」

「え。」

その時だった。

” おい、アレなんだ。 ”

先ほどの男子バレエ部の連中の声だ。

” テツちゃん、あっちになんか、いんだけど。 ”

こつけの状況に気づいたらしい。

” あのお、何かあったんですかあ。 ”

さつきの長身茶髪が俺と同じく他所行きの口調で訪ねる。完全に先ほどの「こととは無関係を装っている。

「いかがしましょう。」

班長（たぶん）は静かに判断を迫る。なんとなく自分の立場が見えてきた。しかし、コレって本当に正解なのか。でも、普通に考えると、おかしい。

それを確認するには、どうすれば…。

でも時間がない。

黒集団のひとりが警棒を握るのが見えて、たまらすこ叫んだ。

「全員撤収ついついついついついつい。」

No.4・転（後書き）

さて、突拍子もない展開です。まあ、後から少しづつ状況がわかつていきます。

今後ともよろしくお願ひします。

短いのもあれなんでここで一つ。多分口の田を見ることないアイデアを一つ。

ヒーローモノ

” Go Average ! ”

ビシ。（「並」を表す”\”サイン）

” 自己阻害社会！ 並才 ライダー ! ”

デザイン、技、敵、
未定。

20・5・色々と始まるなりじー.....。

車に乗つて

(前書き)

前回の奇天烈な展開から、今日は色々と始まるよいつです。

20・5・色々と始めるはじめて。

車に乗って

俺は今逃げている。

あれから俺と黒集団との班長（仮）は走った。

俺は思いついて訪ねた。

「専用車輛は？」

「手配します。」

なかつたのかよ。

……わかつたことがある。

指揮権が何故か俺にあることだ。黒集団への指示は班長さん（仮）、さらに彼女への指揮権が俺にある感じ。俺はいつから現場の指揮官になった？

「乗つて下さい。」

いつの間にか着いたようだ。

早いなあ。

イメージどおりの暗い青色をした、某特殊部隊の車輛が停車していた。

ただ、デザインは、ロゴなどが見当たらず、のっぺりとしていた。隊員と共に後ろの開いたドアから入り、両側にあるベンチ状の座席に腰を下ろした。

ドアが閉められた。

「どうひらまで。」

班長さん（仮）がこじちらで聞く。

「話ができるところまで。」

「では本部に向かわせましょう。」

班長さん（仮）が無線で指示を出すと車輪は動か出した。

Ｚ〇・5・色々と始めるひじこ.....。

車に乗つて

(後書き)

まだまだ続きます。

Ｚ・９・色々と始めるひじこ。

車に乗り込む（前書き）

先ほどの、あまつこ短くて、ハメンナカイ。
色々と始めるひじこ。

20・6・色々と始まるらじしー.....。

車に撞られて

田中と、班長（仮）率いる黒集団は、茶髪長身な少年率いる後輩たちから、専用車輛で逃走。

班長（仮）が言つところの本部へと向かつたのだった。

・・・

車中においては、隊員の皆様方は、ヘルメットを外していた。

班長さん（仮）は金髪を後ろに結っていた。ポニーテイルというより、主婦みたいに小さな筹が後頭部にできていた。

彼女は向かいの、運転席と壁一枚隔てたところに腰を下ろしていた。その隣の人は、体格は彼らの中では平均的（ガツチリしている）黒髪の日本人でスポーツ刈りで、目付きが鋭かった。

その隣は褐色の肌で南国っぽい。名前はわからないが、三つ編みを一面に敷いて後ろで束ねたような髪型をしていて座高が一番高かつた。

俺の隣には班長さん（仮）と同じく金髪だが、瞳は淡緑色の隊員さんがいて、短めの金髪を固めてツンツンにたてていた。

そしてドアのそばに一人ひかえていた。

一人は東洋の人で、短髪を赤く染めていた。iphoneで音楽聴いてる。

もうひとりは茶髪で、今は俯いて寝ているよつだった。

そして、何故か全員が女性だった。

……あれ？ このセリフ前にも言つたか？

AD、台本、八百屋でしくよろー。

……沈黙状態のまま、目的地についた。
その本部はひとつ。

「 ！」、「俺ん家じやん！」

そこは俺が家族と住んでいる家にほかならない。

「 ？」、「まぎれもなくアンタの自宅よ。」
振り向くとそこには覚えのある人物が立っていた。

短すぎないし長過ぎない、でも女性にしたらベリーショートな髪に
グレーのスースを着て、ネクタイを締めた女性が居た。

「 あんた、昨日の。」

「誕生日のお祝い、満足してくれてるようね。」

昨日は気づかなかつたが、タイトスカートを履いていた。

「 ？」、「とこりあんた、俺に何か用か。」

すると返つて来た返事は。

「 用があるのはアンタじゃないの？」

え？

「話を要求したのはアンタのせいじゃない。」

・・・

「じつじままで。」

「話ができる所まで。」

・・・

ああ。

じゃあ、聞いてみるか。

「あんたら、一体何？ どうして助けてくれたの？」

それに帰つて来たのはこれまた意外の一言だった。

「それをアンタに言われちゃ答えようがないわ。」

……。

ものすくじく最近、似たようなことを言われた気がする。

なんで、と言いかけて自分をおさえた。

一番疑問に思つていたことを訪ねた。

「どうして、この人たちを指揮する権利が俺にいつの間にかついてるの？」

彼女は、やつと俺がまともな質問をしたとでも言つかのよつておもへ、ため息をついて答えた。

「それについていうとアタシもアンタの指示のもと動くわ。だつてみんな、あんたの欲求が生み出したものなんだから。」

え。

俺自身の欲求が生み出したもの。

人が欲求で生み出しちゃうす「こ」いやつ。

俺の頭の中に、速すぎてまだ、影しか見たことがない同級生や、上級生が巧みに操りケン力に利用していった炎や、居眠りしているやつの鼻の穴に見えざる力で吸い込まれていく鉛筆の尻、掌で一瞬でできた氷の鈍器。

俺は他にも訪ねる。

「なんで女性ばかりなんだ。」

彼女はすぐに答えてくれた。

「それはあんた、いたって、ノーマルでしょ。そつちは。」

そつちつてなに！？

「じゃあ、俺は背が低い方だが、どうして背が高いやつがいるんだ。

「アンタも知らない被護欲？」

お前はこのままだと親の膚かじるだけで終わるぞ。

あの先生の言葉が聞こえて、胸が痛んだ。

「あんた、名前は。」

「アタシは秘書。名前はまだない。なんでも主人に、ところで、あんた何か用か、と聞かれたことだけ覚えている。」

何処の文豪だよ。

「俺が決めていいか、名前。」

「いいわよ。イタイのはやめてね。」

そうか、お前の名前は。

「お前の名前は……………。」

俺は目を閉じて熟考した。

これだとこうものが思い浮かんだ。目を開く。

「お前の名前は……………。山田だ。」

……。

彼女の反応を待つ。

「わかったわ。少し適当だと思つけれど今はそれでいい。」

・・・

俺は気になることがあった。

でも俺はある先生みたいに、俺が好きなんか、嫌いなんか、とストレートに聞く勇気はまだない。
俺はこう聞くことが精一杯だった。

「なあ、俺のことはどう思つ。」

彼女はしばらく黙つていた。

……が、淡々と答えた。

「今アンタが命令したらアタシを含めて、アンタの欲求から生まれたみんなはアンタに、愛してるといつたり、キスしたりそれ以上のこともするでしょうね。本当のことを言うと、生まれてそう経つてないアタシらは役目に必要な知識は持つていても、アンタに関してはポイントでいうと、ゼロよ。むりやり好きと言わせるのと、アタシらに好かれるような人間を口指すのと、どちらにしたい？」

いわれると確かにそうだ。

俺はまだまだ幼稚だ。

おそらくこの能力には人の上に立つための実力が必要になる。あの先生が言つていたように、自分を見つめ、急いで自分を直していかなければいけない。

「アタシらはアンタが優しいことは知つてる。」

振り向くと彼女は腕を組んで言つた。

「期待してるわよ、リーダー。」

その後ろで、”ハーレムばんざい”と書かれたライトノベルが上げられていた。

「……。」

車輪での移動中、居眠りしていた、茶髪の隊員さんだつた。

ついに、俺は能力者になつたらしい。

Ｚ〇・九……色々始めるひじこ……。

車に乗りなれ（後書き）

まあ、そんなわけで、次回もよろしくお願いします。

20・7・あの時のJET (前書き)

今回は、田中の一年前のことです。
主人公の暗い部分にふれます。
つまらないと言つて、逃げずに、どうぞ、一覽下さい。

2027年の時の「」

……一年前。

その日も俺は、担任の教師に呼ばれた。

その日俺とよく話すやつがテスト（マーク過去問）の時間当番を任されていた。

しかし、時間配分を見誤り、テストがダメになってしまった。
一見俺がどばっちりを受けたように思うかもしねいが、そうではない。

俺はそれ以前に別の科目のテストを任せられていた。

俺は違和感を感じて彼に訪ねた。

「もう、80分経ったのか。」

それに彼は答えた。

「もう、60分経った。」

「どうか。」

現文は60分か。

そのとき俺は彼の「おわり。」の一言で緊張が抜けて、そのまま流れされるように答え合わせに移った。

……いつしてまた俺は間違いをおかした。

しかし、呼び出された俺は言われた。

・・・

今回間違つたことではない。一時的な問題ではない。
お前の一生が掛かっているんだ。

「のままだとお前、

社会に出て、生きていけないぞ。

お前は甘え過ぎなんだ。

オレはお前の親が、甘やかし過ぎたとは、思へん。

世の中には人を殺したり、物を盗んだりするやつがいる。そういうやつは人間性の問題なんや。
それは論外や。

でも、お前は違う。

お前は見えないだけで実は結構優しい。

いつしょにガキみたいに騒ぐ意味での友達ならなつてもいい。
でも、一緒に仕事したり、大事なことを相談したり、一人で成功目指して頑張る、そういうことには向かないんや、

今は。

なんぢや。

オレはどうするつもりなんかって聞いてるんや。

……俺は。

俺が記憶にあるうちでもっとも最初に怒られたのは、頼まれて預かつた荷物をなくしてしまったときだった。

その時俺はまだ5歳だった。怒られて泣いた。泣くな、と言われた。泣かないために考えた。

しかしそれは、俺の間違いのはじまりだった。

俺は怒られることが少なくなった。

……でも進歩はなかつた。

確かになくすことは、なくなつた。

自分の物以外は持たなくなつたのだから。

俺には妹がいる。

本人は男に生まれたかったらしい。三者面談でも母さんが俺と妹が逆の性別で生まれたら、と言っていた。

当然兄妹喧嘩もした。お兄さんなんだから我慢しなさいといわれた。俺はあることに気づいた。

その次から俺は怒られることがなくなった。

俺は妹に反抗しなくなつた、叩かれ引っ搔かれ、泣くことを遠慮しなかつた。

妹を上手く加害者にすることで逃げた。

今まで俺は、あらゆる責任から、避けることが可能な責任から、逃げてきた。

でも、俺は先生に言われた。

大事なのは責任ではない。

責任から、卑屈に逃げ回る、幼稚で醜い、自分を

見ようとすらしなかつたことだと。

俺は先生に再び聞かれた。

お前はどうするつもりなんや。

俺は所々ツッこまれながらも、不格好に自分の言葉を紡いだ。

「僕は……、

今まで……、

目の前にあって、取り組んでいる作業ばかりを見ていて、自分自身がどんな人間でどんな状況にあるかや、周りの人のこと……、見ることを忘れていました。

これから僕は何をするにおいても……、その時、ことに自分のことを見て、足りていらない所をそのときに直していきたいです。」

先生は黙つて頷いた。

これで終わりやないんや。

俺はこれで終わりや。

でも、お前らはこれからもずっと考えてかなきゃならんのや。
ええな？

一日に一度。

5分でもええ。

自分を振り返れ。

そうせんと、ぱあや。

今までの全てが無駄になる。

わかつたか。

自分を見つめる。

生まれ変わつて、別人格に変わるんや。

……。

もう、行つてい。
よく考えるんだぞ。

俺は帰つてからも考えてみよつ、生まれ変わつて、やついた。

N o . 7 : あの時の「J」と（後書き）

どうでしたか。田中が抱える問題について、ドン底なひとにも、自分では普通とおもうひとにも、なかには同じものを抱えていること がいるのかもしれません。

自分はどうなのか。そう思つたひとがいましたら、恐れででも自身を確認してみては。

ちなみに、今回の投稿を友人に話してみると、主人公の欠点を並びあげるのは、タブーじゃないかと言われました。

しかし、主人公の成長（脱ダメ人間）には、避けられません。

田中はこれからどうなっていくのか？

次回もよろしくお願ひします。

No.8・能力の確認（設定資料ではない）（前書き）

今回は、田中の得た能力が具体的な形で紹介されます。
この小説の能力が、超能力モノにおいてどういったものかが、わかる回になっています。

20・8・能力の確認（設定資料ではない）

しかし、俺は超能力者になつたものの。

能力がわからねええ。

とりあえず、聞いてみた。

「なあ、あんたら、どうやって出てきた？」

すると、案外簡単にその答えがかえってきた。

「アタシは知らない。けど、他のみんなはアタシが呼んだ。」

「それまたどうやって？」

その時俺はじつもよりほんの少しだけ神経質だつた。

「ん、ああ、それならコレで呼んだわよ。」「どうやら間違つていなかつたらしく。

山田は手に見た田は、学級日誌と同じトザインの帳簿を持っていた。

「見ただけじゃわからないでしょうから、呼ぶわね。」

それはどうやらプロフィール帳らしかつた。

名前の欄はどうも空白で下に何やら5桁の番号があつた。

山田はそれを確認すると、掌より少し大きい無線つぼいが、若干シンプルな形状の機械をだした。

とんとん……。

C a l l

「ひから山田、え？ 山田って誰つて、貰つたのよ、名前、うん、つか名字だけなんだけどね。」

ンフフ。

まあ、こんな根暗なやつが海（マリン）とか、可愛い名前を付けてもドン引きよ。

父親のネーミングセンス引き継いでいるなら、花子か、由子ね。ハ

ハハ。

そんなことよりアンタ、早くいらっしゃい。何つて、いいから。」

センス的にもそんな名前はつけない。
結構ボロクソ言わてるなあ、俺。
すると、何か視界に見えた。
自然とそちらに目が行く。

山田の隣の床に光る円ができていた。

シュパアアアン。

それは一瞬、柱になると、徐々に薄くなつていった。

光が晴れると。

じいいいいいいい。

そこにはレンズがあつた。

いや、気づいたら、カメラを向けられていた。そんなカメラは、お茶の間のバラエティーでしか、見たことがない。

撮影をしているのはやっぱり女性で、3つは年が上だろう、ライトグリーンのパークーを着て、赤サンバイザーにメガネを掛けていた。見覚えがある。彼女は誕生日の日にこいつして撮影していた。カメラのサイズが違うだけだ。

あの時は気づかなかつたが、少し天パーだ。

彼女は手を顔の高さに上げた。挨拶らしい。確かあの日は他にも。ふと視線を動かすと。
いた。

カメラマンの足元にいた。

黑白カラーの動きやすそうで高級洋食店にいそうな。あの日には気づかなかつたが、白のヘッドセットをつけている。
目が合うと、こちらにスケブ（スケッチブック）を開いた。

カンペラジー。

”

よ

！

”

デカデカとそれだけあつた。

彼女は、こちらにカメラの邪魔にならないように小さく、サムズアップしていた。

スケブがめくられる。

”名前を下せー。”

「じゅわー、山田こ回じく、欲しいらしー。

まあ、俺もじゅう呼ばうか困っていたところだ。

「じゃあ、そこのウロイアレス。」

「家政婦です。」

「すんませんでした！」

あ、どうりで、正統派なメイド漫画の人っぽい格好してたわけだ。

それにしても口を開くと結構キツいなこの人。思わず最敬礼しちまつたぜ。

家庭科で習つて、その日にクラス全員で担任にして以来だぜ。彼女がクール過ぎて生きずらい。

ま、この場合俺が悪い。

「何アホみたいなことを言つていいんです？」

どうやら口に出していたらしい。

「早く名前下せー、この野郎。」

あれ、何か言ったか今。

「何愚図ついてんのよ、名前くらいで。」 そんな俺を山田が急かす。
そんなことって。

お前が電話（つか、通信）中上機嫌に見えたのは、俺の孤独な太陽
さん並みな、ひとりよがりだったのか。

はあ。

「よし、きめた。

お前の名前は、

氷垣だ。

氷、垣根の垣でヒガキだ。」

「どうこうおつもりか知りませんが、その間にある垣根、いつか絶
対に越してみせます。」

いや、お前がつくってんだる。ちなみに垣根の垣なのは偶々だ。
カメラマンが残っていた。

「あなたは、竹林^{タケバヤシ}で決定。」

「決めるの早いですね。」

と、本人は苦笑い。

「これで納得？」

山田の言葉で自分の能力の確認をしていたことを思い出した。

確かに竹林たちがここに来たときのような瞬間転移系の移動手段は、
超能力が一般的な20世紀においても少なくとも、公開はされてい
ない。

「ここ」で一つ聞いていいか？」

「ん？」

「それ、お前の能力だろ！」

俺自身が行使できないところがもはや俺の能力じゃない。
ところで、さつきからこいつ、秘書とか言うわりには俺にタメ口だ
な。

「いいえ、これは本当の意味でアンタの能力よ。」

山田はそう言うと、能力について彼女の立場で話出した。

アタシが意識を持ったのが一昨日、誕生日前日ね。

アタシは必要最低限の知識を持つて、気付いたら立つてた。
影からアンタをサポートするためにアンタから呼ばれた。それだけ
がわかった。

アタシはアンタを見ていて何を求めているかが、なんとなくわかつ
た気がした。

アンタの母親が話している内容からアンタの誕生日が翌日にあるこ
とを知った。

今自分が何をすれば、アンタの欲求を満たせるかがわかった。
でも、それには予算と人員と技術が必要。だからアタシは、アンタ
の能力を使うことにした。

アタシは感覚的に漠然とは、わかった。
でも、この能力、使い勝手が相当悪いの。

おそらく、アンタが未発現、いや、あつても使えなかつたのはその
ためね。

だからアタシはこの能力を見やすいかたちに作り変えた。

アタシらはこれを「名簿」と呼んでるの。

アタシは必要な人員をこれで用意した。

・・・

「 なあ。」

話が終わつたところで、疑問を口にした。

「 なに?」

「 こいつらを生み出したのは俺だよなあ、じゃあ、何でこいつらは俺の知らない技術を持つているんだ? 俺は料理もカメラ撮影もしたことないし、どこの部隊の所属でもないぞ。」

山田は当たり前のよう答えた。

「 それはそうでしょう。

アタシたちは、こうして存在している時点では人間であり、個人であり、自分の意思で動き、自分で見聞きする。

アンタの知らないことのひとつやふたつ、知つてて当たり前よ。」

これは納得だ。となると彼女たちは、幻とかではなくて、一人ひとりの人間であることになる。

俺の頭にはいろいろなものが浮かんでは消えた。

いろいろなことに使つた後は、いつの間にか消えていく炎。

休み時間に、幻影投射能力者の手のひらで腰振つて踊つていて、時間がくると消える裸のエエちゃんや、一瞬だけ、廊下を歩く女子高生の腰を撫でる不自然なそよ風。

それらは役目を終えたら、すぐに消えていった。

しかし田の前にあるものは、そんなものとはまるで違っていた。

消えないし、意思があった。

「アンタの能力はそつこつものよ。」

なんとなくだが、少しだけ掘めた気がした。

「といひでアンタ。」

「何？」

「後ろのみんながなんか言いたそつこじてるんだけど。」

ちび。

「長官（ボウズ）（優真君）！ 名前をそつこ（くれ）（くれない）
かい。」

「長官」は、部隊名未定の隊員さん方。

「ボウズ」は、誕生日ケーキを作ってくれた、20代後半のどこか
オヤジ臭い、高い帽子がトレードマークである、ロックのねじちゃん。

「優真君」は。

。。。

「あなたはじゅう様でしょうか。」

そこには。

茶髪ボブにワインレッドのスースとパンツのクールな（たぶん）女

性がいた。美青年でも通じそうだ。

なんというか、芸大の生徒さんにもみえるし、ひとむかし前の漫画に登場する実業家に見えなくもない。

「まだ名前も決まっていないのに、どちら様とは、大した無茶ばぶりだねえ、優真君。」

彼女は細い目をさらに細めて、苦笑いした。まるで面倒臭がりな猫（たぶん田中の偏見）みたいだ。

「強いて言つなら、ボクは……。」

彼女は真顔に戻る。

「君の株主だ。」

「……。」

「……。」

「でも、それには予算と人員と技術が必要。」

「でも、それには予算と人員と……。」

「でも、それには予算と……。」

「……予算、……。」

「そういうことだったのか。

……。

みなさん……、どうやら……。

「うちの能力には、株主がいるよ！」です。

…… 言つてて、会社みたいだな。
そんな立派な指導は難しいが。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

俺は山田に連れられて、広いスペースを出て、廊下を数回右、左……と曲がる……。

「上るわよ。」

カツンカツンと梯子を上る。

上がるとき上つてきたといひまし、いわゆるハッチといつものだった。
そして……。

「……俺の部屋じゃん！」

バタン。

それはハンドル状の取手がついていた。

「それ、アンタやアタシらの指紋を認証してでしか、開かないよ！」
にしてるから。」

セキュリティか。女子大生も安心だな。
どうするんだこれ。

いや、なにが、ってコレ部屋のど真ん中にあるんだぞ。

扉から。

左、ベッド。

正面、窓、机。

視線を下に45度ずらす。

ハツチ。

いや、ホント、どうすんのよ、そこへト！」

「大丈夫よ。そんなこと。」

彼女はハツチの隣に屈む。

。

彼女はハツチに両手を置く。

「せえ、の！」

ズスー。

！

動いた。

ハツチは……、スライド可能だった。

「せい！」

彼女は今度はハツチを立てた。床とは垂直方向に。

「こうすれば、カバンにだつて入るわよ。」

……さらに携帯可能だった。

「よつ！」

山田はハツチを床に下ろすと、俺のベッドの下に収納した。

「ね、便利でしょう？」

……さらに部屋の収納スペースにも優しかった。

「…………。」

みなさん……、うちの能力は、基地を保有しているようです。

・・・

現在の人員確認

秘書・・・山田（ヤマダ）

カメラマン・・・竹林（タケバヤシ）

専属家政婦・・・氷垣（ヒガキ）

ゴック・・・山縣（ヤマガタ）

特殊部隊（名称未定）

班長・・・北河（キタカワ）

副長・・・石見（イワミ）

鋭いひと。

最高身長・・・南河（ミナミカワ）

南国っぽ

いひと。

最高筋力・・・春川（ハルカワ）

短い金髪

をツンツンにたてたひと。

主に見張り役・・・焼津（ヤイヅ）

東洋系赤髪のひと。

三川（ミカワ）

スポーツ刈りで眼つきが

茶髪で瞳はグリーンで、若干長めのボブのひと。ラノベ読者。

No・8・能力の確認（設定資料ではない）（後書き）

それと、この小説の進め方が定まりました。同席した友人に言われました。

「そんな無茶な。」

2019.11の秘書はタメ口をやめなよ（前編）

今日は田中の学校生活について触れていたいと思います。

20・9・11の秘書はタメ口をやめよ

名前はわからない、小鳥の声が聞こえる朝。

「俺はいま……、本当に……これでいいのだろうか。」

それが田中の一日において決まっている、第一声だ。
彼はあの日教師に言われた。

・
お前は考えていないとダメだ。

ぼつとをしていると、また自分を見なくなる。

・
・

やがて、口にかかるところで田中は自分のことで認識しやすくなる。

今日、必要になる課題。

今日の時間割。

今日もある毎日恒例の課題。

起きてしまうこと。

朝食や洗面などの。

大体いつになるとまでに家を出るべきなのか。

そういうことを教えるのに彼は未だに慣れてなかった。

そして俺は、いつきます、と呟いて家を出た。

そのまま駅に向かう。

高校に向かうバスに乗った。

はじめはそれでもないが、目的地に近づくにつれて、高校の制服が

多くなつていいく。

皆テレビ番組や、ネット動画、高校の課題のことなどを話している。
俺は課題をしつつ、若干田んぼの多い通学路の景色を脇見する。

・・・

空は青く、…………… 5割強は雲だが。

田んぼはあおあおとしていた。

……途中で、みかんのイラストがはいった白ヘルから茶髪をのぞかせた無表情の女性が、紙袋を積んだ地味なスクーターに乗つて隣を通過していくのが見えた。

どこかでみた気がするが、……気のせいだろう。

・・・

そうこうする内に、バスは高校前に到着した。

彼が入つていった校門には、

「百済音高校」とあった。

もちろん、超能力は一般的であるから、専門校があつたり、成績や、クラスの優劣が決まつたりということはない。

背が高いだけでトップクラスにはなれないと同じである。

それに危険であるなら、すでにそれなりの施設におくられでいるであろう。

火氣操作能力にしろ、放電能力者にしろ、ライターなどの便利な日用品と比べたところで、

根本的な危険性に違いはない。

個人が用心する以外に仕方ないのだ。

廊下を歩いていると、すぐ隣をサツ、と黒い影が通り越していく

た。

「おはよ。」

向かいから来た女子がそれに挨拶をする。

気づくとすでに通り過ぎた後だ。

どこかで聞いた少年アイドルグループの曲が流れる。
先ほどの女子が何やらじごんじしだす。

着信があつたらしい。

「…………。」

メール内容を確認した彼女はただ一言漏らした。

「口で言えよ。」

どうやら先ほどの生徒はかなり急いでいたらしい。

それよりも田中は、あの影も返事は返すんだな、と感心していた。

「なあ、キヤッチボールやるつぜ。」

「あの赤い水道管屋の兄さんが投げるような火の玉、ビリするりやいいんだよー！」

あちらもあちらで楽しそうだ。

参加は……遠慮したいね。

「ふほう、へんつぴつぐはあ（くそつ、鉛筆がああ）！

「殴られたいの、まつちゃん？」（氷の鈍器精製）

今日の2のBはいつもどおりだ。

・・・

学校が終わると、そのまま校門へと向かった。

歩きながら考える。

一年前、俺は真下を向いてここを歩いていたな、と。

名前も知らない先生とすれ違ひざまに挨拶をかわし、校門を出た。

「…………、きたわよ。」

ん、待ち合わせか、俺も中学の頃に…。

「…………ユウマ！」

ん、誰か俺の名前を読んだ気が…、ま、こんな時こや氣のせいであることが…。

「ユウマー！」

俺の襟が何かに引っかかる。

！

そして上半身が後ろに滑るよつ引っ張られる。

「のぐお？」

「ああもう、だからあ。」

振り返るとそこには。

「迎えに来たつてんでしょうバカ。」

秘書のはずだが、タメ口な山田がいつものグレーのスカートとスリットという服装で立っていた。

つか、とうとう「バカ」とまで言われた。

……まあ、今の現状、じゃそれも仕方ないことだ。

彼女は最近になつてできた日常における異常だ。まあ、生み出した（ことになつて）いる（こと）俺は置いといてだ。

言つてつてなんだが、タメ口秘書なんて史上初じゃね？

・・・書いた僕が友人に話すと、もはや秘書じゃねえ、って返されたからねえ。

サツ。

「…………今、なんか言った？」

「いきなりナニ？ アンタ、変な声でも聞いたの？
ヒゲのオジさんにハガキ書いたら？」

運がよかつたら、ハレテゾ君よ。」

それはあまり嬉しいない。

・・・

俺は帰宅途中必ず寄る公園があつた。

広い砂地のスペースが中央に取られていて、その周りをタイルが敷いてあり、他に小さなシーソーと、揺れる遊具、隅にレンガで温もりあるデザインの公衆トイレがるだけの素朴な、悪く言えばダメな公園だった。

でも、夕方になると、公園全体が茜色に染まるのは、悪くなかった。遊具にえしい公園ならではの悪くない光景だ（美しいなんて”ことば”は、俺にはまだ似合わないとおもつて）。

「なあ。

「ン？」

誰かと外で話すのは、久々だ。

「何よ。」

俺は知らず知らずのうちに笑みを漏らしていったらしい。

「今日な…。」

本題に入った。

・・・

この日も俺は先生に呼ばれていた。

先生いわく、素行は問題ないそうだ、むしろ周りで過激なヤツは、故意でないにしろ、ガラスを割つて説教をくらつたそうだ。

俺の場合はは表に出る問題というよりも、根本的な問題だそうだ。俺は呼ばれた時思い出した。

・
・
・

その日もテストがあつた。

それは英語のテストで、制限時間は、80分だった。
俺の成績は散々で、200点中、92点だった。

俺はただ焦つて前から解いていた。

そのことがいけなかつたらしい。

最後まで解けずに白紙の回答が残つた。

・
・
・

俺は先生に説教された、そのうちに気づくことがあつた。
以前よりも物や用事を忘れなくなつたが、問題の配点をよく見なかつたり、問い合わせよく読めばわかることに気づくのが遅かつたりした。自分の、一部分に気を取られて、全体を見失うという欠点が、猪突猛進という形になつてあらわれている。
その事を先生に言つと。

お前はことばを聞く限りわかつてはいるんや。

でも、これで終わりにしたらあかんのや。

続けないといかんのや。

ええな、自分自身をいつも振り返るんや。お前はそうせないかん。

・
・
・

「ま、そんなことが今日あつたんだ。」

山田は俺と同じく夕日に染まつた公園を眺めつつ聞いていた。

「ふうん。」

彼女は立ち上がった。

「ちょっとついてきて。」

そして歩きだした。

…………何だろう？

…………着いたところは高校だった。

うちの高校は、警備は特別な日以外はいない。
放課後はほとんど人がいなくなる。

だから部外者である山田がいても咎める人はいない。
俺らは今、昇降口の広場にいた。

彼女は急に立ち止まると、こちらを向いた。

「アンタ、今日がいつなのかわかる？」
いきなりそう尋ねてきた。

「え……と。」

答えようとした。…………でも、答えが出なかつた。
思い出せない…………。

朝のことは辛うじてだが思い出せた。

そのことが示すのは…………。

（……俺はいまだに平均未満だ。）

そつそつとうに漏らすしかできなかつた。

「5月××日、木曜日よ。」

ああ、今日は、と俺の頭がそれを認識する。

「アンタはダレ?」

「田中 優真。」

「いじは?」

「田済音高校。」

「アンタ、何年生?」

「高校2年生。」

「何組?」

「B組。」

「番号。」

「15号。」

「何のために高校行つてんの?」

「それは……。」

俺の両親は医師だつた。

医療は基本的に能力は使わない。たいてい、他動的治癒能力だろうと、なんだろうと細胞を変性させるものだからだ。

操作手段が精神的では危険である。

俺は病気をした時に両親に看てもらひついて思つたことがある。目の前の人があんな些細なものであれ身体の不調で苦しんでいると、自分は薬を持ってくる人や、医者の診察を待つていられるだろうか。

多分自分が医師であれば、知識があれば、診察できたら、薬物の処

方ができたら。

何でレスキュー隊じゃダメなの?と聞かれるかもしれないが、そうしている時でも続く苦しみには、強力な胃薬であったり、疎い人はわからない楽な態勢に保つことであったり、直接的に身体に働きかけることで治まるものもある。

しかし、自分は父親のように外科医は無理だと思つ。自分でも、手先が器用でないことはわかる。

それに他にしてみたいことがあった。

・・・

4月のことだ。

中学校は男子校だったが、今通う高校は男女共学だった。

俺は思春期に入つて、意識してしまい、自分を嫌悪して、そしてもともとが人見知りで、その上成績も悪かつたため、全てはまとまり「劣等感」へと姿を変えた……。

そのときだつた。俺はよく胃を悪くした。堪らなくなつた俺は医師に見てもらつた。

診断結果は、神経過敏のようなもの、だつた。

そんな俺への処方箋は強力な胃薬と「……まあ、気にするな。」の一言だつた。

それは突き放すような物言いではなく、凍える様に縮こまつた小物な俺を優しく包んだ。

病院のロビーを出たときに、悪くないねと口からじぼれたのを憶えている。

・・・

……だから俺はストレスに携わる医師にならうと思つた。

・・・

そう、山田に話したとき、俺は何かを掴んだ気がした。

今、俺は、高校で、将来のために、勉強し、そのためにここにい

る。

やう認識した。

遠くの方で、今まで氣づかなかつた車の走行音がした。周りの音が急に増えたようだつた。

「そつか……。」

俺はまた周りを見失つていたのか……。

「アンタもまだまだつてことよ。」

山田は腕を組んで、溜め息とともにわずかに微笑んだ。

「アンタはまだ終わつてないでしょ。しつかりしなさい。パン、と背中が叩かれた。

ふと、山田のやうを見た。

短かすぎもせず、長すぎもしない、グレーの髪は無機質に緻密に整えられてはいるが、それは柔らかくもあるやうに思えた。

人形のように整つていて、しかし、得意気な笑顔には、温もりが感じられた。目を見ると、少し暗めの蒼い瞳に吸い込まれている気がした。山田はこんなにも、…… × しかつたのだろうか。

「こまわらう氣づいた？」

どうやら、またも口に出てしまつていたらしい。

山田は照れるのでもなく、俺が最も予想していた「キモッ」というのでもなく、ただ腕を前で組んで、フフン と鼻を高くして、こちらに対して微笑みを向けていた。

「あはははは……。」

俺は頭のうしろを搔いた。

そして、ひとことだけこいつ言つた。

「田代、あなたがいい。

」

20・9・ひの秘书はタメ口をやめよや（後書き）

何か変更があれば、活動報告にて連絡しますので、その時は。
次回もよろしくお願いします。

パートナー（前書き）

この回では、田中の能力に関わるメンバーを紹介していきたいと考えております。それでは一人目、いきます！

山田

ヤマダ

年齢 : 19歳

役割 : 秘書、「名簿」の管理、その他、あれば事務的なこと。
 特徴 : 短すぎず長すぎない、じれりぱりとした、灰色の髪。

白いワイシャツにありふれているグレーのネクタイ、グレーの背広とスカート。

深く蒼い瞳。タメ口。

眞面目そうに見えて、実はぐだけている。

雑記 : 見た目は田中とそつ離れていないくとも、2つ年以上。

秘書なのになぜか田中に対してはタメ口。

今のところヒロインっぽいポジションにいる。

秘書だろうと、田中に逆らえないはずの立ち場だ(ひつじ)(20・6 を参照)

田中を甘やかしたりはしない。しかし、たまに田中の背中を押すこともある。

田中の人格的な成長に期待している。実はボディーガードとしても機能す

「アムー（後書き）

たまにいれてこいつと思っています。

No.10 : 能力名は.....(前編)(前書き)

今回は超能力モノにはつきもののアレについて扱って行きます。

No.10 : 能力名は……（前編）

俺は近頃、迷つてることがある。

それは……。

「うわ、すげえ、氷製造能力ってこんな使い道があつたんだな。」

「俺の火気操作能力だって、お前の伸びたヤツをバーバーするのに……。」

「お前は何もするな！」

「こり、席に着きなさい。物理的念動能力はそんなことのために使うもんじゃありません。」

「ツチ。」

「ほい、ほまへ、ふ」しははんへいしゅる（おい、お前、少しば反省しろ）！

能力名って、俺の場合どうなるだろ？

この国において、能力は個人の管理に任されていて、能力名は、大
学に引きこもつてらつしやるお偉い方が決めるのでも、世界の転覆
を目論む厨一なサイエンティストが決めるのでもない。

本人が好きに決めてもいいのだ。

まあ、俺には関係ないことだが……。

俺は今までに起こったことは非公式にしておくつもりだ。

能力から生まれてきた存在が、人として見られるとは限らない。北
河たちが紛争地帯に向かうのを見たくはない。

さて、本当にどう決めたものか。

・・・

昼休みになつて俺はすぐに購買のパンを買いに行つた。

カレーパン（裏声）！ と、中華まん（肉まんもどきぱん）を買いました。

ふぬぬぬ……、パタン。

原付独特のエンジンを切る音がした。

化学の教師だろうか。

・・・本編には出ないけどね。

「あれ、また変な声が……。」

ドン。

思ひ音にそちらを見ると。

「三川屋です。」

「…………。」

いつかの茶髪のミカンライダー（原付）がいた。
といつよりも……。

「三川さん、何してんですか。」

うちの能力の隊員さんその六の三川だった。（第5・6・8部、参考照）

ミカンマークのヘルを取つた彼女がじてり、と首を傾げると、少し長めの茶髪のボブが揺れた。

「配達…………？」

グリーンの瞳がこちらにあつた。

落ち着いた優氣な声色が、山田のよひに呼び捨てこすれりとをいつらに遠慮させる。

「なんでミカンなんですか。」

「ミカワだから……。」

ほけや

た
ぶ
ん。

それはあなたの偏見なのでしょう

新編 金瓶梅

「まあ、ありがとう。」

「かわいい、かわいい」とかわいらしい歩き方で原付にもどる

「…………＝カン屋、またの利用お待ちしております。」

ミカン原付を駆る三川のシルエットは遠くの一 点となつて消えていった。

」
。」

最後、屋号が変わった……。

•
•
•

放課後のことだつた。

・・・さてと、今日も田中はそのまま帰宅。

サツ。俺は振り返った。

…………。

また変な声がしたからだ。

「あれ？ 気のせいかな？」

俺は気を取り直して歩き出した。

・・・（小声で）まさか僕の声が、聞こえるなんて彼はやっぱり特別なのでしょうかね。まあ、微妙なことに変わりはありませんが……。

校門が見えてきた。

「……お、おい。」

おどおどした男の声がした。

振り向くと、そこには、特徴的な男子生徒がいた。

髪は、染めてはいないが、ワックスで無造作ヘアーをつくりっていた。目付きは鋭く、制服のポケットに手を入れて立っていた。彼は誰かを睨んでいるようだった。田中は小説の主役ってあんな感じだろうなつと、自分とは違い、勇敢そうな顔立ちを眺めた。そして、睨まれている相手は……。

「氷垣ーー？」

そこには、うちの能力の家政婦である、氷垣がいた。

こちらを向いた。

気づかれた！？ 僕、そこまで大きな声で言つてないぞ。

「そこからなら、もう十分です。」

俺と彼女らとの距離は1・5メートルほどだった。

あと、また声にでていたらしい。

必然、彼女がこちらを向けば、もう一方の男子生徒もこれに気づく。

まあ、なんだ、俺もそいつの視線に刺されたんだ。
ちやらり、ちやあらあん。

「そんなメロディを出してもはじめからビートにも疑惑はありません。

「すさんだのはサスペンス劇場のあれだ。

わからない人、俺もほとんど見てないから気にするな。

……依然と、俺は睨まれているわけだ。

と、いうわけで……。

「ちょっと、ガッキー、んもおう、この人こわい！」
まあ、バカップルがやるアレだ。

「私にどんなリアクションを期待しているのですか。」「

だが、返ってくる反応が冷たい。

「……チツ、俺はやつて見たかったんだよ！」

・・・そんなことじや読者が引いちやうと、僕は思つんだな。

サツ。

「どうかしましたか。頭がおつかれですか。」

「え、ああいや、今変な声がした気がしてねえ？」

「はやく帰つて休むことをおすすめします。今外出されでは、まわりに迷惑が掛かりますから。」

……ん？ 一応俺を心配しているようだが、部分的に俺が罵倒されている気が……。

「そういうわけで私はこのやう……、いえ、この野郎を自分のブタ箱にお連れしなくてはいけません。ではこれにて……。」

「おい」「ちょっと待てよ、おい！？」。。。

もう一人何か言いかけてたけれども、これだけは見過ごせない。

「ええ！？ 今のなにいつたい！？ 君、家政婦なんでしょ！？」

一般的に家政婦つて、雇い主立てるんでしょ！？

訂正するならまだしも、途中で諦めた上に、

「がんばれ! もー?」

すると氷垣は、静かにこう答えた。

「私は、別にあなたに雇われているのではありません。」

ほへ、ほけきよ

え？

その時俺の胸にくるものがあつた。それは、一言で表すなら、恐怖。
何かをなくすかもしない恐怖だった。

俺は堪らなくなつて彼女に尋ねた。

「まあ、あなたは、俺の……こせうじゅなくて、その気にな

正直言つて、答えはわかっているけど一応。

卷之三

いや、わかつていただけど実際に聞くと、衝撃がヤバイ。

俺は泣きそうになつた、でも、あの教師が言つていたから、俺はこ
られた。

「そうか。」

俺はどうもなくなつて両の手を地につけて一言。

卷之三

「それ、ネタの賞味期限は大丈夫ですかねえ。」

やべえ、不安になつてきた！

「おー。」

ん?

「あ、俺この人どつかで見たことあるだ、ほら、アレ、アレアレ！」

あのカツコいい人！ ほら、あの人気バラエティに出てる人！

「安心して下さい。別にいきなり取り繕わなくても、それ程著名な方ではありませんので。」

あれ？ 氷垣、合わせてくれるのは嬉しいけど、どうしてそんな嫌そうな顔してるの？

「見たも何もさつきからここにいるだろ！？」

かつこいい彼は何やら立腹の様子。

ちょっと待つてね。

きゅーいーいーいーいーいーいーん……力チャ。

ええっと、五分ちょい前の校門の真上のアングルだねえ。

お、学校から歩いてくる俺、特にことではない。

さつきは気づくのは後だったが、校門前に人待ちをしているウェイ・メイドさんがいる（つか、冰垣、わかっているみたいにこっち凝視すんな！？ つか、恐！？）そこに男子生徒が近づく。主役登場、つてところか。（・・・何を言つているの？ きみこそ主役だろ。）サツ。また変な声が！？（余所見しちゃいけませんよ、この野郎）冰垣にたしなめられる。ところでいつたいどこに…。

「いや、俺写つてたでしょ！？」

ほら、そこにいるほら、そこ

男子生徒オレだから！ 「

あああ！

「ああ！ ……じゃねえよ。軽く流すなよ。いただろ、オレ！？
お前おかしいだろそれ！？」

俺は浮かび上がった自分の問題点に驚愕した。

うわあ…………。

衝撃が俺を襲つた。

「俺つてヤバイかも！？ 今ので一ヶ月分会話したことになる。」

「誰がお前の一ヶ月の会話の量を問題にした！？ いや、オレは無視すんなつつってんだよ！」

おお！

「いや、感心するとこじやねえだら！？ セー！」

まあ、ともかく……。

「ありがとう、竹林。いい仕事したね。」

「あざつす。役に立てて、こっちが嬉しいっスよ。」

後ろの方で腕を組んでいた、ライトグリーンのパーカーの彼女が赤いキャップの上から頭を掻いていた。

赤いメガネが輝いて見えた。……俺の能力のカメラマン、竹林だ。

(第8部参照)

・・・え？ サンバイザーはどうしたかって？ 覚えていてくれた？ それは嬉しいね～～。キャップの方が楽だからそうだよ。覚えてくれてた人、いたら、嬉しいなあ。

サツ。……まあ、いいや。

え？ 校門の真上からどうやって撮つたかだって？

そんなことを聞いたってつまらないだろ。

え？ なんで竹林がいるかつて？ そりやあ……。

……。
なんでだっけ？

ほお、ほけきよ

「いや、だから、お前が思い出せないなら、巻き戻してみようつて
言つから、そこのメイドが……。」

ポオオオオオオン！

殴つたあああ！？ あ、よく見たら口刊くだらね、つか、ここのは

高校、よく平仮名表記OK出したな。

「何すんだよ。そこのメイド！？」

俺も別にいいけど聞いてみたい。

「馴れ馴れしい。」

「じゃあ、どうすりゃいいんだよ。」

「明後日の方を向いて、『そこにいらっしゃる自分が田にするのも
おこがましい、尊い御仁』と呼んでくれたら結構です。」

「面倒くさ！この人面倒くさ！ つか、どんだけ偉いんだよ！？」

語尾は謹んでいるようでも全く持つて遠慮がねえ！
とりあえず……。

俺らは、いまの状況を確認するために、俺個人と能力についての記
録をまとめてくれている竹林が撮影した映像を、折りたたみ机の上
の小型ディスプレイで、三人仲良くパイプ椅子に座つて見せてもら
つていたわけだ。「一ヒーも出たよ。

「タナカーメンもあるつすよ。」

「テレビ局の食堂かよ！ 因みにそつちは山縣（うちの能力の「
ツク」）特製らしい。」

「いい加減本題入るつよ……。」 ああ、さつきのカツコいい人。

撤収！ と、竹林が号令をかけると、なんていうか、アレ、ADのみなさんっぽいのが地味で機動性ある服装で、ディスプレイや、机、椅子などを片付けていった。

最後に、ピンクのフード付きを着たボブヘアのADさんがトコトコ近づいてくるのなんだろう、て思った。

「微糖」くれた。

うちの能力のADさんは、気が利くようです。

もう、そろそろいいいか？

かれこれ三十分が経過していた。

じいいいいい。

見ると竹林がひとり残つてこちらの記録を撮っていた。
俺はそのレンズを見ていま自分がなすべきことを感じた。
俺は俯いた。
まとまつた。

俺は再びレンズに顔を上げると叫んだ。

「CMのあと！」

……ないけど。

No.10 : 能力名は.....(前編)(後書き)

アレ?
う?
氷壇を出すとギャグパートになるのはどうしてでしょう?

次回もお楽しみに。

「アマニ（福井）」

では、今回やこつてみよう！

「ラム2

竹林

タケバヤシ

年齢 20歳

役割 田中についての記録。カメラマン。

特徴 赤いキャップにメガネ。グリーンのパーカーを着て下は本文では描写されていないが、ツッコミようがないほどのデザインのシャツである。口調から、雰囲気からして裏方っぽい。

雑記 彼女は登場する時は田中にクローズアップしているが、今回は妙なアングルから撮影している。

ADの他にもスタッフも設置したから、そのおかげで撮影手段が広がったのだろう。

本来の仕事だけでなく、再放送の番組の録画を引き受けてくれるあたり、サービス精神がある。

氷垣

ヒガキ

年齢 24歳

役割 田中の専属家政婦 他の人員のアシスタント

特徴 表情は静止したようで、話す時になつてやつと人らしさが見える。

家政婦のはずだが、口がシヴィアに悪い。

紺の長袖と膝下までの長さの紺のスカート。下には紺の長靴下を履いていて、身に付けているものではエプロンとヘッドレスだけが白い。

雑記 きつと、心のどこかでは、田中を慕ってくれている……かは、微妙。

「トム2（後書き）

書いてて気づいた訳ではありませんが、ギャグパートどうか波乱の予感がしそう……かは微妙。

No.10 : 能力名は.....（後編）（前書き）

そういうえば、はじめてですね、前後編。
ま、そんな訳で、行っちゃいましょう。
今回も、ひょうきん者で、よろしく！

N.O.10 : 能力名は.....（後編）

俺たちは校門前に対峙していた。

目の前には髪を無造作ヘアに固めた眼つきの鋭い男子生徒が何やら、動きやすいように腰を落として構えていた。

俺はというと、見よう見まねで動きやすいように構えた。「エクササイズ番組を視聴する人みたいですね。

カラになつた「微糖」を持つて.....。「捨てたらどうですか？」

「.....。

静かに俺の言動にツッコミを入れている氷垣は、ただ、何をするのでもなく、体の前で手を組んでたたずんでいた。

俺がいま対峙する、目つきの鋭い無造作ヘアのカツ「いい人は、なんやかんやあつて、只今俺らと決闘することに決まつた。というか、勝手に決められた。ドラマの再放送の録画という理由は通用しなかつた。

「それならウチのモンでやらせときますんで、.....P.I.!
「こちら竹林ツス。.....というわけで、しくよろ～～。
竹林がやってくれるらじし。

「で、あんた誰？」

「また忘れたのか！」

「.....いや、そういうやあんた、まだ名乗つてないだろ。」

「ああ、それか.....お前には関係ない。」

「ほひ、「」覽なさい、この野郎。」

「.....いや、あんたに何がわかるの？　いや、ドヤ顔されても.....。」

「

とにかくやりたかっただけらしい。誰に似たんだか……。

「俺はこいつに用があるんだ。」

どうやら氷垣に用らしい。

「私が門で優真様をお待ちしていたところ、このか……ソレが私がここで何をしているか、誰に仕えているかなど、いろいろ尋ねてきましたのでうるさくて仕方がありませんでした。……それに拳句の果てには私の名前を尋ねてきましたので、関わる予定もない者に教える名前はない、と返した次第です。」

あ、そうか。

「いわゆるナンパだね。」

「なんでそうなる！」

意に介さないようである。

「お前が校門前で3人に絡まれていたから助けてやったんだろうが！」

「そうなのか？」　　ああ、そういうえばモニターの画面右下が途中でなんか騒がしいと思つたら、やつてたのかアレは。

「そんなこともありましたね。」　　氷垣はあまり気にしていないうだ。

それを見て、カツコいい人は大きくため息をついて、無造作ヘアーケを搔きむしつた。

「はあ、わかつた。言うよ、俺は、コクジョウ、黒上　守だ。」

「クジョウ、マモル……、主人公的だ、何より響きがいい。

「羨ましいのですか？」

「いや、別に。」

聞こえたらしい。

「ああ……マジで殴りたくなってきた。」

バチバチ · · · · ·

見ると黒上くんとやらは、なんか……右手に紫電を纏わせていた。

バチバチバチバチ
.....。

それはまた先ほどのよう^{ヒト}に手のひらに集められる。

放電音が連續的なものから一つの音に変化していく。

紫色の輝くエネルギー球を持ち上げるように掲げた。あ……、何というか、これはヤバそうだ。

「もういいかげんに、行かせてもらひます。」

ダダダ……。

紫電の塊が今俺に叩き込まれようとしている。

田中の前に現れた、主人公っぽい超能力者である黒上 マモルは無造作ヘアーの間に見える目を細めて不敵な笑いを浮かべた。

…… い、こひきゅあひひひひひひひ

…… 彼はすべつた。

俺たちは音のほづを見た。

「…………もしもし。」

そこには、バイクのハンドルにカンマークのヘルメットを置いた三川が携帯電話でていた。

「三川さん、 なんて着メロいれてるんですかー!?
いや、ブイー、 じゃなくてですね……。」

「…………そろそろはじめるや。」

振り向くとそこには……。

バチバチ、バチ……。

黒紫の電気をその身に纏わせた黒上の姿があった。

その放電はやがて、右腕に集約されていく。

先ほどから見ていてそれは何というか……得体が知れない。色からしておかしい。

当たつたらなんか怖そう。
俺は逃げる姿勢をとつた。

「いろいろとバカにしてくれたけどな……。」

黒上は、まるでイタズラをするときの子供のような笑みを浮かべた。

「俺の『黒紫の雷』を受けてもそういうられるかな？」

黒上はそう言つと、その手にある放電はやがて、ひとつのおエネルギー一球へと形を変えた。

バチバチバチバチ…………。先ほどよりも小さかつた、理性よりも感情の方が今は強いらしい。それでも、危険はそこまで変わらない。うわ、今その周りにある空気中の動きが視認できるぐらいに凄まじいことになつてる！？

確かに今日は乾燥しているそうだからな。

彼は、ありふれた投球フォームをとつた。

「い…………つけええええ！…………え？…………え？」

彼は途中で攻撃をやめた。

。。。

その場の雰囲気が変わっていた。

殺気に支配されたとは別の意味で殺伐としていた。

何時の間にか、通行人による大衆がそこにはあつた。

ひそひそひそ…………。

「ほら、いまなんて言つた？」と通りすがりの先輩方。
「黒紫のなんとかつて……。」とその連れ。

雰囲気が変わつたのには理由があつた。

まず、この時代においても本屋で手に入る小説にはSFモノがあり、超能力モノもある。パイロキネシスや、なんとかアイズ、テレポーテーション。能力名はシャープなモノが多い。確かに、所有者である俺たちには、能力名を決める権利がある。

しかし、国のほうもそれを管理しなくてはいけない。だから必然、それは住民票を始め、役所に提出する重要書類に記入する必要があり、他にも人生のいろいろな場面で大きく関わつてくる。もちろん、結婚式における新郎の紹介にも。

「……新郎、黒上マモルは、『黒紫の雷』の能力者で……」「まあまあたいそうなお名前ですねえ」と遠縁のおばあさん。

……いやあ、少なくとも俺じゃ耐えられない。

「あいつ……病じゃね？」

そここの女子高生、たぶん聞こえてる。

……とまあ、こういうわけだからこの国の能力者がもつ能力には、地味でダサイ名前が多い。

俺は痛感した。やっぱり能力名は大事だねえ。

「クソ！ 気を取り直して……。」

それ以上は続かなかつた。

「……。」

彼は声が出なかつた。

彼の腹にはあつたからだ。

紺の長スカートから伸びた、紺色の長靴下につつまれた、無駄なモノがない洗練された氷垣の長い足が。

重い袋が落ちたような音だつた。

……どうしてこうなつているんだ？

「優真様、時間の無駄です。行きましょう。」

いつもの器械的な氷垣がいた。

俺は驚いていた。あの面倒臭がりな氷垣のことだから、傍観するモノと思つていた。

何か確認をしたくなつた。

……でも、いい方法が思いつかなかつた。

今日はお開きになつた。

・・・

翌日、家を出ると氷垣がいた。

通り過ぎようとするとき、彼女は丁寧な礼をして言った。

「こつてらつしゃこませ。背中に氣をつけてここ登校ください。この野郎。」

背中に何があるんだろ? な、本当。

……。

俺は振り返った。

直立不動な氷垣と田が合った。

なあ。

「俺は……、このままあなたを俺のためにだけ働かせていいんだろ? うか。」「

ただ沈黙が続いた。

もう、完全に無視されてるな。そつ吐つたとき、やつと氷垣は、その動きそつこない静止しているような口を開いた。

「たしかに私はあなたに雇われているわけではありません。」やはりそこは動かなかつた。「ですが……。」彼女は眉ひとつ動かさずに続けた。

「ひどいブタ箱、好きでもなければ、とづくで逃げします。」

俺は頭が止まつた。たしかに言つていいことは表面上はひどい。しかし、そこにはいつもはよくわからない、何かに対する愛着が見えた。俺は堪らなくなつて、気付けば、思つていたことを氷垣に対しひてぶちまけていた。

「俺の親が苦労して建てた家をブタ箱言つな！　しかも、人んちに何点けようとしてんだよ！？」

彼女の黒いボブヘアを風がさらりと吹いた。

彼女は依然とした無表情で応答する。

「いえ、流石に私は優真様の立派なご両親を侮辱するようなことはしません。あくまで優真様の自室でござります。」

家政婦が面と向かって本人の部屋のダメ出しするなよ。

No.10 : 能力名は.....(後編)(後書き)

ちょっと一月ほど休みます。ここ読んでない人も「お知らせ」で更新します。

また、その時まで.....。

ひょーきん者に.....よろしく!

今日は若干多い。

三川

ミカワ

年齢 24歳

役割 特殊部隊（名称未定）隊員／補足・弁当屋店
舗の存在は不明。

特徴 長めの茶髪、色の薄く、陶磁器を思わせる肌、
グリーンの瞳、身長は170センチ、と高め。

田中に付けてもらつた名前を気に
入つてかは不明だが、なぜかミカンがいつもそばにある。

原付免許取得済み。ミカンマーク
のヘルメットに茶色のコートで田中に弁当を届けるのが田下のところ日課になつている。性格はテキトー。
バイクの荷台にある紙袋からもわかるとおり、暇な時には「楽しい
ところ」に行つてゐるらしい。

役割のとおり、軍人でもあるから、
部隊の訓練にも参加している。

雑記 大変、お部屋を拝見してみたいメンバーである。
一応軍人だから、喧嘩もできる……
かもしれない。

氷垣

ヒガキ

年齢 24歳

役割 田中の専属家政婦／他の人員のアシスタント

特徴 表情は静止したようで、話す時になつてやつと人らしさが見える。家政婦のはずだが、口がシヴィアに悪い。紺の長袖と膝下までの長さの紺のスカート。下には紺の長靴下を履いていて、身につけているものではエプロンとヘッドレスだけが白い。

もともと運動神経も良く、揉め事は苦手…………、といづ訳でもないらしい。

雑記 きつと、心のどこかでは、田中を慕ってくれている…………きつと。

「アム3（後書き）

氷垣の印象が変わりましたか？

お知らせ

寒くなつてきました。

このJではひょつきん者によるしふへとが乗らせていただいております。

突然ですが、一ヶ月ほど休ませてもらいます。

用事ですので、それが済み次第、更新できるか否かに關わらず、報告させていただきます。

毎週アクセス数を見て思ひ出しております。

はじめ僕はウキウキしつつ投稿しながら、このまま誰にも認められずに終わるのでは、と思いつつポイントばかり見ていました。

文才には自信はありません。でも、かつて同級生だった友人の「お前の書いた小説が読んでみてえ」の一言を思い出すと同時に、この自分が考えた世界をこの世に読んでみたくなり、こつして投稿するに至りました。

今では、ユニークアクセス数を見ていて思ひます。

僕は恵まれている、幸せ者だ、と。

これからも、一月ほど後になりますが。

ひょつきん者J.....、

۴۵۷۸-

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7727x/>

能力名はT.N.K.

2011年11月24日10時54分発行